

「超・勝利すること」

(ロマ8:35～39)

挽地茂男

2020.3.22 日本基督教団千歳丘教会礼拝

今日読みました聖書の箇所で、パウロは、非常に珍しい言葉を使っています。それはギリシア語で〈ヒュペルニカオー〉という言葉で、37節に出てきます。「しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは…輝かしい勝利を収めています」という文章の「輝かしい勝利を収めています」という言葉です。口語訳聖書では「わたしたちはこれらすべての事において勝ち得てあまりある」と訳されていて、「勝ち得てあまりある」と訳されている言葉です。また新改訳聖書の「わたしたちは…これらすべてのことの中にあっても圧倒的な勝利者となるのです」という翻訳で、「圧倒的な勝利者となる」



と訳されている言葉です。この言葉は、古代のギリシア語文献でも用例がほとんどありません。実は新約聖書では、この箇所になしか出て来ません。新約時代の聖書以外の文献的証拠もごくわずかで、確認可能な用例は三つしかありません。非常に「まれな言葉」なのです。

この〈ヒュペルニカオー〉という言葉は、〈ヒュペル〉という言葉と〈ニカオー〉という言葉の合成語です。前半の〈ヒュペル〉は英語の〈ハイパー(hyper)〉にあたり「超越する」とか「～を超える」とか「～より上」という意味をもっています。例えば〈ハイパーソニック(hypersonic)〉と言えば、〈ソノル(ソナー)[う]sonor音〉を超える、つまり音速を超えるという意味で、飛行機に使えば「超音速」ジェット機とか「超音速」旅客機となります。同類の言葉としては〈super〉や〈ultra〉という言葉があります。後半の〈ニカオー〉という言葉はギリシアの勝利の女神〈ニケ〉の元の言葉で「勝利する」、「勝ちを得る」という意味の動詞です〔スポーツ用品メーカー・ナイキは勝利の女神ニケ NIKE の英語読み〕。つまり〈ヒュペルニ



カオー〉という言葉は、「超越する」という言葉と「勝利する」という言葉の二つの言葉の合成語なのです。一時の若者言葉で、「超～速い」とか「超～うまい」とか、水泳の北島康介選手であれば「超～気持ちいい」のような、「超～」という言い方がはやりましたが、これに倣えば「超～勝利する」となります。もちろんパウロは「軽口」をきいているのではなく、真剣な意味でふつうの勝利を超えていると言っているのです。パウロがこの日常あまり使われない言葉を用いた理由は、彼の経験した「勝利」が、あるいはその勝利の感覚が、通常人が経験したり考えたりする勝利をはるかに超えていたからなのです。

わたしたちが今日読んでいる箇所は、この「超～勝利する」という動詞と相まって、全体として非常に力強い、一種の勝利宣言になっています。有名な神学者(ポール・ティリッヒ)が、この箇所の持つ特有の力強さを次のように語りました。「それ〔このパウロの言葉〕は、

炸裂する爆弾の響きよりも強く、死者の墓前で立ち上る号泣よりも強く、病の床にある病者の吐息よりも強く、死に逝く者の(苦痛と悲しみの)呻きよりも強く、自らに絶望した者の失意の溜息よりも強く、わ



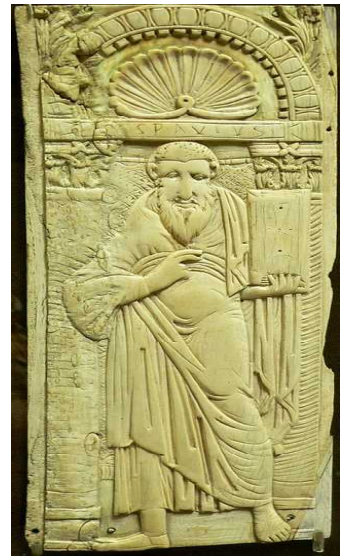
れわれ人間の存在の深みに潜む変わることのない不安のささやきよりも強く、(われわれに)迫ってくる」と申しました。つまりこの神学者は、この言葉のもつ強さを、人の生きる意欲を消沈させる力に勝利する、人生の勇気をうち砕こうとするあらゆる力に勝利する、一種独特な、質的に異なる強さととらえているのです。では、パウロのいう勝利は、具体的に①何に対する勝利で、また②勝利の力(強さ)はどこから来るのか、パウロの文章に温ねてみたいと思います。

今日の箇所の、直接的な文脈は31節以下ですが、もう少し文脈を広く取って18節から見てみたいと思います。面白いことに――勿論偶然ですが――8のつく節を辿っていくと、文脈の背後にある

パウロの感情がざっくりと見えてきます。まず 18 節。「現在の苦しみは……」で始まります。「苦しみ」です。パウロの発言が「苦しみ」を背景として語られていることがわかります。28 節。「神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くいうことを、私達は知っています。」つまり「現在の苦しみも、すべて益に働く」と希望を明かにするのです。つまり第二の文脈(背景)は「希望」です。そして先程の「輝かしい勝利を収めています」(37 節)という勝利宣言の直後の 38 節。「わたしは確信しています…」と、「確信」を宣言します。第三の文脈は「確信」です。つまり「苦しみ」と「希望」と「確信」がこの手紙の——少なくともこの部分における——執筆者パウロの感情を支配しています。感情的文脈と言ってもいいかもしれません。

もう一つ、パウロの語り方にも注意しておきます。この部分、特に 31 節以降では、ギリシアの弁論術で使われる〈ディアトリベ〉といわれる論争形式が使われています。日本語訳ではこの論争形式

があまり鮮明に訳されておりませんが、問を立てて、それに答えるという、「…でしょうか」「…なのです」という四組の問答によって、31 節



以下は構成されているのです。第 1 問答、31 – 32 節。問—8:31 では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。答—8:32 わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか〔すべてを賜るのです 反意疑問〕。第 2 問答、33 節。問—8:33a だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。答—8:33b 人を義としてくださるのは神なのです。第 3 問答、34 節。問—8:34a だれがわたしたちを罪に定めることができますでしょう。答—8:34b 死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちの

ために執り成してくださるのです。
第4問答、35－39節。問—8:35a
だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。このあと引き離す力をもつものを、あれや、これや、と列挙して、最後に39節で答えて「誰も引き離すことができないのです」と宣言します。この第4問答が今日のわたしたちの聖書箇所です。



原文のリズムに注意をしながら読むと、この箇所は、まるで交響曲の第四楽章で、テンポを速めつつ、ついにティンパニーの連打が鳴り渡り、いよいよクライマックスを予想させるような高揚感に満ちています。特に今日の箇所の第4問答ではパウロは興奮のあまり、その高揚感に自分(パウロ)自身が吞まれているかのようにさえ見えます。パウロの気持ちの高鳴りのために、問答(論争)の形式が大きく変形しています。実際パウロという人は、その様な高揚感の中で、かなり露骨な表現や、強烈なイメージ言語を——あまり上品とは言

えない言葉もありますが——「サラッ」と言いおける人なのです。このクライマックスに向かっていく高まりの中で、最初に取り上げた特別な動詞、〈ヒュペルニカオー〉「超～勝利する」という動詞が出てくるのです。それは通常の言語表現では、パウロが、自分の心の高まりを表現しきれなかったからだと思われます。わたしたちが今日読みますのは、繰り返しますが、このギリシアの問答形式〈ディトリベ〉の第4問答の問とそれに対する答えとしての勝利宣言の部分です。

では35節の問—「8:35a だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。」引き離すものがすぐ後にリストされます。35節bです。「艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」このリストは、パウロがその宣教活動の途上で経験したさまざまな苦難をさしています。パウロが「苦難の使徒」呼ばれるのはそのためです。36節にあるように、紀元1世紀の宣教活動は死と隣あわせのような危険を伴う活動だったのです。「わたしたちは、あなた〔神〕のために

／一日中死にさらされ、／屠られる羊のように見られている。」詩編 4 4 編 2 2 節の言葉です。屠殺用の羊がいつ殺されるか分からないように、殺す者の意のままにいつでも、いかようにでも殺されてしまう、そんな死の危険に晒されていたと言うのです。またコリントの信徒への手紙二の 1 1 章 2 3 - 2 8 節に同様の苦難のリストがあります。「11:23〔彼らは〕キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。11:24 ユダヤ人から四十に一つ足りない鞭を受けたことが五度。11:25 鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。11:26 しばしば旅をし、川の難、盜賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、11:27 苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありま

した。11:28 このほかにもまだあるが、その上に、日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事があります。」

まるで満身創痍です。しかしパウロは「苦難の使徒」と呼ばれると同時に、「喜びの使徒」とも呼ばれるのです。彼が経験した苦しみは、彼の希望と確信を粉碎することはできなかったのです。彼は高らかに勝利を宣言します。3 7 節「しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。」「超～勝利している」のだと語ります。そしてパウロは、その勝利の源泉が、苦しみを越えたところに、苦しみの現実を超越したところにあることを示します。その勝利の源泉を、パウロは「愛してくださる方」という言葉で表しています。それはパウロがつねに帰っていくことのできる彼の強さの源泉なのです。彼の本当の強さは、強さからは一見離れたところに、つまり強さの常識を超えたところに、その源



を持っているのです。わたしはナポレオンのこの話をよくいたしますが、世界制覇に敗れて流刑に処せられるナポレオンが、イエスをさして「神の国と愛しか語らなかつたこの男は、今も世界を征服し続けている」と言ったと伝えられています。



勝利宣言が終わりました。なのに、38節以降、パウロはまだ語り続けています。彼は、キリストの愛から自分を引き離す可能性を持つものの新しい第二のリストを提示して言います。38－39節。

「私は確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高いところにいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」ここでもパウロは「主キリスト・イエスによって示された神の愛」に密着しています。これが彼の強さの源泉だからです。

さて、この神の愛からわたしたちを引き離すものの第2のリストは、第1のリストと少し違います。実はこの第2のリストは、古代ヘレニズム世界で人間の運命を支配すると考えられていたものが列挙されているのです。ほとんどは対になっています〔**「対」を確認**〕。死も命も／天使〔天上(神)の支配権を行使・代行するもの〕も支配するものも〔地上の支配者〕／現在のものも、未来のものも／高いところにいるものも、低いところにいるものも。4つの対と、対になっていないものが1つあります。まずそれから。(1)「力あるものも」(デュナメイス**力も**)。力が自分の運命を切り開くことも、他人の力がわたしたちの運命を左右したり、時には閉じてしまうこともあります。これまでのさまざまな戦争を見れば分かることですが、強大な軍事力、政治力、経済力は、ひとりひとりの小さな運命など蹴散らしてしまうのです。第二次世界大戦の戦死者は、世界で6200万人〔5500万人という数字もある〕、日本人310万人とされています。強大な軍事力、政治力、経済力、さらに科学技術や知識の力を加えて、力が世界の平和を左右し、人々の運命を左右

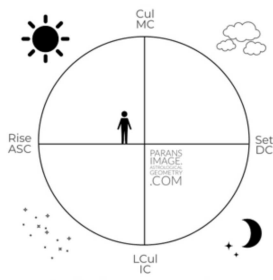
していくのです。しかしパウロはこれらの強大な力〔力あるもの〕に対しても勝利を宣言するのです。

次に(2)「天使も支配するものも」つまり天上の支配者と地上の支配者です。「天使」(アンゲロイ)は守護天使として古代の都市や国家の運命を守り、また導く存在と考えられていました。つまり天使は天上的支配の代行者(agent)すなわち神の支配の代行者と考えられていたのです。ですから、パウロの時代には、その天使を礼拝する「天使礼拝」は、広範に見らる現象でした。現在でも「天使」という名前の都市もあります。Los Angeles (ロス・アンジェルス)——非常に犯罪が多いですが。一方、地上を「支配するもの」(アルカイ 支配者)。多くの若者たちが支配者の一言で戦地に向かわされ、戦場に散っていったのです。高見から下される命令によって、命を落とす人々は歴史に絶えないのです。ヒトラーやスターリンやあるいはブッシュやトランプの判断一つで、運命を変えられ



てしまう人たちがいるのです。

そして次に(3)「現在のものも、未来のものも。」時間もわたしたちには、支配できないもの、どうにもならないもののひとつです。逆戻しも、速く進めることもできません。「時間という目に見えない支配者」という言い方をする人もいます。「現在のもの」(エネストータ)。目の前の現在も、かつて過去の時点では見通しをつけたと思っていたのに、実際は、全く見通が外れていたことを思い知らされ、やがて過ぎ去ると振り返ることしかできず手の届かないものになります。わたしたちは、自分の目の前にあるものを上手く支配〔コントロール〕しているようでありながら、それに支配され、それに突き動かされて否応なしに前に進んでいくのです。ですから「明日があるさ。未来があるさ」というある種の幻想や期待で自分自身を言い聞かせて生きる人間を、「未来のもの」(メロンタ)は——現在のなれの果てでしかないのに——願望、期待という美化された不安のなかに人の心を捉え、その不安のゆえに、「今を生きる」ことをさらに不安定にするのです。むしろ人は未来に来るものに対して自由であるのではなく、未来のもたらす訳のわから



ない不安に支配されているのが常なのです。

つぎに(4)「高いところにいるもの

も、低いところにいるものも」(高さも深さも)という言葉ですが、これが長らくよくわからなかったので、色々な解釈がされてきました。「高いところにいるものも、低いところにいるものも」という翻訳も、この言葉がよく理解できなかった人の翻訳です。ここには単純に「高さも深さも」としか書いていません。「高さ」ってなんだろう、「深さ」ってなんだろう。解釈者を悩ませました。実は最近この表現が**占星術の用語**であることがわかってきました。「高さ」(ヒュプソーマ)とは、その人の星が〔地球の〕頂点に達したとき、人は、人生最高のとき、絶頂期を迎える。「深さ」(バトス)とは、その人の星が最も低い位置に達したとき、人は、人生最悪のとき、死のときを迎えると言われました。**星の上昇と下降によって人間の運命が支配されると考えていた古代占星術の用語**なのです。

そして(5)「死も、命も」。死と命は、**肉体的生命を支配するものです**。しかし死と命は別物、相反するもの

ではなく、互いに従属するものです。

「死」(タナトス)は**ギリシア神話では神(タナトス)として考えられており、「眠り」と双子の兄弟として、人間を「命」(ゾーエー)から、また人間を生命的な活動から遠ざけるものと考えられていました**。

しかし、命があることだけを人生と考えると、「死」は命に対してその敵のように見えてきます。しかし、死もまた人生の一部なのです。少なくともキリスト者にとっては命だけが人生ではないのです。作家の**三浦綾子さん**は生前、「わたしにはもう一つ仕事が残っています」「死ぬという仕事が残っています」と仰っていたのです。また聖路加病院の院長を長らくされていた医師の**日野原重明先生**は「死を生きる」という言い方をなさいました。それは長い医師としての経験から死を「人生の最後の段階(ステージ=舞台)として鮮やかに生き抜く人たち」を見てきたからです。その経験は『死をどう生きたか』という本になりました。彼らは、死を冷静に、そして大切に考える人たちです。小説家の**遠藤周作**は、ひょうきんな一面の強い人ですが、キリスト教徒になったおかげで「じたばたして死ぬる」、「かっこよく死ぬ



必要はない、神様が全部受け取ってくださるからだ」と生前によく語っていた人です。また彼は「死んだら亡くなった大好きな母や兄

に会える」ということを晩年、夫人や弟子たちによく口にしました人です。弟子の加藤宗哉氏に向かって「お前さん、死んだら愛する家族に会えるんなら、死ぬのも怖くねえなあ」とよく語っていたそうです。パウロは、以上の古代ヘレニズム世界において人間の運命を支配すると考えられていたものに対する勝利を、しかも**圧倒的勝利**を宣言するのです。

勝利宣言を可能にしたのは何だったのでしょうか(v. 35a, 39b)。もう一度見てみましょう。35節前半。「**8:35 a** **だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょう。**」39節後半。「**8:39 b** ……**どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。**」勇気は愛からやって来るの

Yes, Jesus loves me!

です。どんな空元気もこれにはかなわないのです。パウロはキリストの十字架を指してローマ書5章8節でこういいます。「**5:8** **しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。**」この聖書の箇所は、**キリストの死がわたしたちに対する神の愛の表現〔love letter〕**だと述べているのです。パウロは、**十字架に命のかかった愛〔命がけの愛〕**を見出すのです。パウロを支えていたものはキリストの愛が、また神の愛が与える勇気だったのです。そしてこの愛は信仰を通して与えられるのです。それはそれは努力の成果ではなく、信仰の出来事なのです。愛とは相互信頼の出来事だからです。

パウロは自分の運命を支配するものに対して、勝利を確信しています。それは神の愛から彼を引き離すものなど存在しないからです。そして最後にもう一つの視点が導入されています。それは「被造物」という言葉が示しています。「被造物」は「創造者」に従属するのです。下にいるのです。その「創造者」の愛からいかなる「被造物」も彼を引き離すことは不可能だと

宣言するのです。そして自分を創り、この世に生を与えてくださった「創造者」が生かして下さる命を感謝し、キリスト・イエスによって示された愛を受けとめるとき、苦難と運命の支配を超えたところから来る力が満ちてくるのです。

以前に水野源三というひとりの詩人をみなさんに紹介したことがあります。この方は、ご存じの方も



多いと思いますが、「瞬きの詩人」と呼ばれている方で、幼い頃に脳性麻痺で、目と耳以外〔口と首から下の機能〕の機能を失います。ですからご紹介する詩は、五十音表をおう母親の指をおいながら、自分の眼のまばたきで字を拾うようにして創られた詩なのです。キリストの愛にふれたときの、自分の中に起こった変化を謳った詩です。素朴な詩ですが、その変化の重みが伝わってきます。新約聖書の著者の中で、自分の中に起こった変化が、自分を変え、自分の生きる世界を決定的に変える生涯を生きた人は誰かと問われれば、パウロだと誰しも答えるでしょう。彼はキ

リスト教迫害者から、キリスト教を宣べ伝える宣教者になるという人生の大転換を経験した人でした。お話の結びに水野源三さんの詩を読んで、パウロの大転換に思いをさせつつ、終わりにしたいと思います。

キリストのみ愛に触れたその時に
キリストのみ愛に触れたその時に
私の心は変わりました
憎しみも恨みも
霧のように消えさりました

キリストのみ愛に触れたその時に
キリストのみ愛に触れたその時に
私の心は変わりました
悲しみも不安も
雲のように消えさりました

キリストのみ愛に触れたその時に
キリストのみ愛に触れたその時に
私の心は変わりました
喜びと希望の
朝の光がさして来ました

新しい1週間の歩みのために、
祈りましょう。



2020.3.22 日本基督教団
千歳丘教会礼拝